

## 「落語と私」 その拾壺

### 三代目 橘ノ百圓

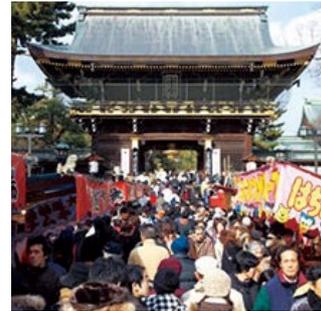
#### 十三 初天神

新年を迎へ最初の二十五日が、天神様のご縁日、初天神です。この噺は、扇馬師匠が三代目圓を名乗るにあたり、先代圓、当時の桂三木助師にご挨拶に伺った時に、三木助師から付けて貰ったと聞いてます。元は上方根多で、皆さんが良く聴く初天神の流れとは、大分違いますが、三木助師も、上方の噺家さんからだと思えます。

「あらずじ」

初めて羽織を作って嬉しくてたまらない、父親の熊さん、羽織を着て初天神にお参りに行こうとしている処に、腕白小僧の金坊が帰って来て「お父ッつあん、何処へお出掛ですか?」「何処へも行きァしないヨ」「出掛るよう、羽織着てるじゃねエか、あたいも連ッておくれヨ」「駄目だヨ」

「良いじゃねエか、あたいも君の子だろ」「この野郎親をつかまえて君だてエやら」(中略) 金坊「どうしても駄目なの!? じゃあ良いヨ、あたいにも覚悟が在るぞ」「親を脅迫してやんな、良オし、何ンでも良いや、出来るもんなら遣ってみろ」と言われた金坊は、向いの家に行き、父親に聞える声で「お向いのおじちゃん、面白いお話し聞かせて遣ろうか、ある夜のお父ッつあんとお母ッさんの出来事てェんだけどナ」と両親の夜の話しを始め出す。親父が慌てて「金坊連ッて遣るから帰ッて来い」と呼び戻し、二人でお出掛け「金坊言う事聞かなかつたら川ン中ホッポリ込んじまうぞ」の小言も効かないので「伊勢屋の番頭さんに頼んで蔵に叩き込むヨ」「伊勢屋って、あの質屋の伊勢屋さんか? そうだろうナ、家にはもう目ぼしい物は何ンにも無エからナ、お父ッつあん、入れても良いけど流しっちゃ嫌だヨ」テな会話をしつつ、天神様の境内には色ンな店が出ていて「お父ッつあんリンゴ買っておくれヨ」「リンゴ三十五円、リンゴは毒だ!」「何ンだヨリンゴが毒なのか、三十五円が毒なのかハッキリしておくれヨ」(中略)「じゃあ飴なんか子供らしいだろ、飴買っとくれヨ」飴を買って貰った金坊が、飴を口の中に入れてそのまま歌い出すので熊さんが「ホラ、下に水溜りが有るぞ・・・下に水溜りが有るてエのに」と思わず背中を叩くと「何言っでやんで、水溜りは下に有るから良いじゃねエか、水溜りが上に有りァ世の中逆さまだ」「この野郎泣きながら理屈言っでやら、男の子が一ツくらい殴られたからって、パイパイ泣くんじゃねエ」「テやんでエ、あたいは殴られたから泣いてるんじゃねややい、不意にポカッと来たから、飴落ッこどしちゃった」「そりァ迂闊に殴れねエや、まだ洗えばシャブレねエ事もねエだろう(周りを捜す)何処にも落ちちゃいねエじゃねエか」「お腹ン中落ッこどしちゃった」。これから団子を買って貰い、親子で団子屋を擲揄って、やっと人混みの中をお詣りを済せての帰り道、金坊が風屋を見付けて、お強請りして大きな風を買って、二人で風揚げをしようと、先ずは、親父が調子を見る為に金坊に風を持たせて、風向きに合せる様にと指



北野天満宮・初天神

出典：<http://kitanotenmangu.or.jp/index.php>

示を出すのですが、金坊は酔払いの男にブツかってしまい「どうも濟いません、手前の餓鬼なんすヨ、オイ泣くんじゃないヨお父ツつあんが付いてんだから」と、今度は熊さんが同じ酔払いブツかって、金坊が「どうも濟いません手前の親父なんすヨ泣くんじゃない、あたいが付いてるんだから」、これが落です。何んだか半端な落ですが、圓師匠は「これで教えて貰ったんだ」と言っていました。

「圓師匠の説明」

これも仕草の多い噺です。一ツツ丁寧<sup>ていねい</sup>に指導してくれました。子供が無理に寝かされて、布団の中からお母さんの様子を見る処、お参りに行く途中の親子の目の位置、金坊にせがまれて、ヨイヨイヨイをする時の手の振り方と、父親の満足そうな顔、やはり一番難しかったのは、団子の蜜を舐める処ですが、ハッキリと違いを出す様にと言われ、仕上げの時に「お前は理屈で考え過ぎだ！流れで遣れ」と、この時も小言を喰いました。そして何より親子の情、金坊がお向いのおじさんに夫婦の話をする時は「品良く」と説明を受けました。

#### 十四、禁酒番屋（禁酒関所）

この噺は、三代目小さん師が大阪から仕入れたもので、やはり大分東京向けに変えてます。滑稽噺<sup>こっけい</sup>の多くは、※上方根多<sup>かたぎ</sup>を移したものですが、大阪人気質<sup>かたぎ</sup>、東京人気質<sup>や</sup>で演り方が違って来ます。「猫の災難」も、大阪通りに演じたのでは、東京人には引かれてしまうと思います。そこは、商人文化と武士文化の違いですかネ!? 圓師匠は、誰に付けて貰ったかは訊きませんでした。が、「門の傍<sup>わき</sup>に関所を設けます」と言っている処をみると、上方の圓都師あたりですか? 私は、さすがに「番屋<sup>や</sup>」で演っています。大阪では、仕返しの小便を溜る時に、女中にも協力させるのですが、東京では先代の馬生師がこれを受け継いでましたが、弟子の雲助師も、この方法を取り入れてます。たまに聴くと面白いですヨ。

「あらすじ」

ある藩中で若侍が花見の宴、酒が入って口論となり二人が真剣勝負、結果一人を切り、勝った者は殿に申し訳が無いと、腹を切る。殿様は、大事な家来を二人まで失うはめになり「以後、酒を飲む事は罷りならん！」と禁酒令が出る有様。驚いたのが家中の酒飲み、もっと吃驚<sup>びっくり</sup>したのが出入の酒屋さん。ところが時が経つと、このお布令を破る者が現れる様になり、取り締りの為、門の傍に番屋を設けて酒を飲んで帰る者はないか、酒を持ち込む不届き者は居ないか、ここで調べる事になるのだが、そこはそこ、何んとかこの番卒を騙して寝酒の一升を小屋に入れる様にと、家中きっての酒豪、近藤が酒屋で二升の酒を立飲みしながら「金に糸目は付けんから頼んだぞ」と他所に飲みに出てしまう。酒屋の若い者が「カステラ」だと言って番屋を通ろうと、菓子屋から買って来たカステラの箱に、五合徳利を二本入れ、水引を掛け、菓子屋から借りて来た。半纏、前掛を着け「進物用」ですと告げて上手く行きかけるのだが、箱を持つ時に「どっこいしょ」と言ったのを侍に尖められ「もう一度これに出しなさい。出せと申すに」水引を外され、徳利が現われて「カステラが斯様な物に入るか」「いや、それは新しく売り出しました“水カステラ”で・・・」「何イ、水カステラだ!? 役目の手前中身を改める。門番湯呑を持って参れ、嫌、大きい



一升 徳利

出典：<https://search.yahoo.co.jp>

方が良いナ」と、二人の侍に一升飲まれて「この偽り者奴！」と、脅かされて店に帰る始末。二人目は油屋に化けたが、これも失敗。三人目が手を挙げると酒屋の番頭が「お止し、もう二升も只で飲まれているんだから」と、止めるのも聞かずに「大丈夫ですよ、今度は酒じゃないんですから。小便を持って行くんですから」と、皆んなで腹癒せに一升徳利一杯にして「お頼み申します。近藤様のお小屋へ小便のご注文です」大いに酔った侍が「何ィ!?小便の注文だ。小便を何ンと致す」「へエ、何ンでも松の肥にするとか」「バカァ、こちらに出しなさい。役目の手前改めなくては相ならん。これに出しなさい。今度はどうやら欄を付けて参った様ですナ」と、口まで持って行くが「プッ、何んだこれは!?」「ですからハナから小便だと申しております」「ウウン、ここな正直者奴が」。反対落ですかネ、マア受ける噺ですが、諄く演ると引かれます。

#### 「圓師匠の説明」

この噺は、始めの「水カステラ」から「油徳利」が有って「小便屋」に繋る訳で、禁酒令が出た為に、好きな酒が飲めなくなった侍を、どう出すかです。当然、番屋に詰める侍も酒好きでなくては成り立ちません。水カステラから油徳利と、段々と酔う様に厳しく言われました。徳利の栓を抜く時も、一番目、二番目と違いを見せて、三人目は栓を放る演出で、これは言葉ではなく、仕草でシッカリと見せてくれました。又、侍は侍らしく酔う様に、三人への「どうれ」の対応も違える様に教えてくれました。そして、三番目は湯呑を決して口に着けてはいけない、全体の雰囲気でお客様に解ってもらう様に、そこを押しではいけないと強く言われました。

#### 「落語豆知識」

##### ※「上方根多と東京根多」

同時期に三都で発生した辻噺も、京都は余り広がらずに、大阪中心になって行きました。辻噺は人の多勢集る所に仮小屋を架け、表を通る人を呼び込もうと、派手な音と客足を止める為の笑いの多い噺へと発展した訳で、ハメ物、出噺子は大阪の演出を、大正になって東京に移したものです。現在の滑稽噺の七割は上方根多を東京風に変えたものです。例、欠伸指南(欠伸の稽古)、新聞記事(阿弥陀ヶ池)、たらちね(延陽伯)、茶金(はてなの茶碗)、数え上げたら切がないです。江戸噺は、武士、廊噺等は大体がそうですかネ。近頃は、東西交流も盛んになり、落語の益々の発展を願います。( )内は大阪題名



4代目 桂米團治 (上方噺家)

出典：<https://ja.wikipedia.org/wiki/>